

加藤美南子著

八幡平レポート

命を守る農業



はじめに……………13 7

第1章「感覚と理屈」……………13 7

プロローグ

わが家の運命を変えた子どもの病氣

未知の光？ 体験

光が見えるのは隙のなせるわざ？

薬毒に対する恐怖

初めての救急車体験

アトピー、猛威を振るう

イライラが募ったわが子が不良の仲間に

第2章「岩手での暮らし」……………27

岩手行き

体中を襲った酷いアトピー

お世話になった中学校と、担任の先生

第3章「波動との出会い」……………33

世界は波動でできている

波動機器を知る

波動でアトピーの原因と対策が判明

食べ物を見直す

波動機器で判る食品の良し悪し

食生活の改善に本気で取り組む

子どものストレスは親が主原因であった

アトピー、遂に完治する

アトピーに悩む人の解放を願う

松尾村民になつてから

社会に頻発する忌まわしい事件の原因

47 46 45 43 42 40 38 38 37 36 35

第3章「波動との出会い」……………33

第2章「岩手での暮らし」……………27

31 30 29

第3章「篤農家へのインタビュ―」その②……………99

弟妹の病気を食事で治してしまった高橋泰輔さん

重金属で汚されていた田畑

ポカシを大量に投与して土壌改良に成功

重金属の害を打ち消す牡蠣殻石灰

消費者に頼りにされている高橋さん

良いものは口コミで広がる

アトピー性皮膚炎も治る高波動の作物

人間には三つのゆとり(余裕)が必要

高橋宅のポカシ作りは三月から

健康に良くて美味しい作物は作れる

第9章「わが家でポカシ作り体験記」……………113

参加しなきゃあ、分らない

ポカシは堆肥の醗酵促進剤

《ポカシ作りの材料》

《ポカシ作りの手順》

有機農業は循環型

ポカシの温度管理に精出す

記録は分かり易く、役立てばOK

第10章「自然療法実践の巨人たち」……………126

わが道を突き進んだ四人

何もしない農業の提案者・福岡正信さん

慧眼と勇氣の士・安藤昌益(番外)

命を自然と共に楽しむ川口一さん

自然療法を「農業の芸術」と呼んだ岡田茂吉さん

自然療法を無農業で作った木村秋則さん

「自然療法実践者」四人に共通するもの

139 136 132 131 130 127 127

第4章「アマガパン・レポートとの出会い」……………49

現代日本への警告書でもあるアマガパン・レポート

今の日本が抱えている問題の根源は？

異常な食事が起こす頭の異常

分子栄養学の先駆者、ロジャー・ウイリアムス

54 52 52 51

第5章「農業とは何なのか？」……………57

農業の基準

生活環境に蔓延している農業類

残留農業に関し、ネガティブからポジティブへ

安全が先か、効率(経済)が先か？

現代農業が人間を蝕んでいる

活性酸素について

過度のストレスは活性酸素の発生源

66 64 63 62 61 59 59

第6章「安全な食べ物作りをめざす」……………69

岩手での充実した日々

建前、理想論では国民を養えない

スィスで見えた有機農業

今村奈良臣さん提唱の農業の第六次産業化

農業がゼロだと、総ての産業がゼロになる

80 78 76 75 71

第7章「篤農家へのインタビュ―」その①……………83

まるで宗教家のような農業者、横田幸介さん

「ポカシ」作りが土作りの第一歩

健康に良い作物は先ず土作りから

農作物には作る人の心が入る

岩手の生んだ宮澤賢治の贈っていたもの

土に残留している有害物質の除去が大事

根氣よく土作りをするのが肝要

95 94 93 91 89 85 85

第1章「わが家のポカシ作りの続き」……………141

順調な仕上がりが

保存すればいつでも使えるポカシ

146 143

第12章「無農業リノゴ作りの弟子」……………149

木村秋則さんの指導を受けている佐々木悦雄さん

木村さんの理想を追う佐々木さん

完全無農業のリノゴジュース

遠野で集う自然栽培の仲間たち

153 152 152 151

第13章「アマガパンで有機栽培を始める」……………155

テレビが後押ししてくれた

遅ればせながら、安心安全農業事始め

経験者は教えたがる

無農業でも虫がつかないやり方

農家の皆さん、ありがとうございます

水のやり過ぎでトマトの葉に病気が…

緑は命の象徴

163 162 161 160 158 158 157

第4章「ホリスティック医学に取り組む医師」……………167

自然治癒と癒しの医学を行っている似内裕さん

代替医療とは何か？

病氣と食べ物の関係について

患者さんのことを考え抜いた「記録ノート」

病氣予防には生活習慣を見直すことが大事

昔と変わって来た食事のあり方

人間の体は食生活の急激な変化に対応できない

健康館で提供されている食事

体に良い食べ物は健康な土作りから始まる

(自次・次ページへ続く)

175 173 174 173 172 171 171 170 169



加藤美南子 (かとうみなこ)

1942年生まれ、千葉県出身。小学校～高校卒業まで神奈川県小田原市で過ごす。

青山学院大学文学部英米文学科卒。商社、外資系半導体メーカー勤務後結婚。神奈川県相模原市に住む。1995年に子どもの病気がきっかけで、岩手県八幡平市(旧松尾村)へ移住。

以来、縁あふれる岩手の風土と歴史に魅せられ、童話・紀行文・随筆・小説・論文・絵本等を書く。童話『続け、いのち』は2011年第64回岩手県芸術祭芸術祭賞受賞。著書に小説『だんぶり長者の遺産』『瀬織津姫浮上』(上下巻)、絵本『だんぶりちようじやのこしたたからもの』、『いずれもツーツライヤ出版』がある。岩手県歴史研究会、岩手児童文学の会、八幡平市朗読ボランティアさくらの会各会員。季刊総合文芸誌『みちのく春秋』同人。特定非営利活動法人日本成人病予防協会及び財団法人生涯学習開発財団共同認定による健康管理士一般指導員、文部科学省後援健康管理能力検定1級。

「八幡平レポート・命を守る農業」

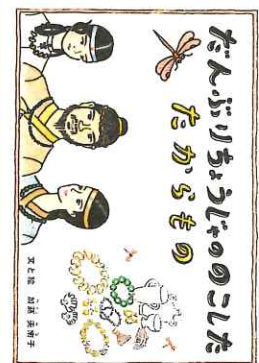
発行 2018年 3月 10日 初版第一刷発行
著者 加藤美南子
DTP 加藤美南子 (本文、表紙カバー、イラストを含む)
発行所 有限会社ツーツライヤ
〒028-3621

岩手県紫波郡矢巾町広宮沢 10-513-19
TEL.019-681-8121 FAX.019-681-8120
定価 本体 1667円+税
ISBN 978-4-907161-97-2

<加藤美南子の好評既刊著書>

『だんぶりちようじやのこしたたからもの』

—絵本・北東北の有名な古代伝承—



およそ1500年前の古代日本の東北地方に、貧乏だが正直でよく働き、親孝行な若者がいた。トソボの導きで長者になった若者の娘は、都の天皇の妃になり皇子を生む。困難な目にあつたとき、やさしさに溢れた彼らが取った行動は思いもよらないものだった。日本中の子どもたちに知ってほしい東北人の心意気を子どもたちに分かりやすく伝えていく絵本。

A4版、34ページ、ツーツライヤ刊、¥1600(税込)



『THE TREASURES OF DANBURI CHOJA』

—英語訳付き絵本『だんぶりちようじやのたからもの』—
日本語版の絵本を、英語圏の外国人にも楽しんでもらえるよう、英語訳も付けてリニューアルした版。昔々、日本の東北地方に貧乏な若者がいたが、トソボのお陰で東北一番の長者になった。トソボはなぜ彼にそんな幸運をもたらしたのだから？ だんぶり長者の伝承は日本人の誇りであり、やさしさのモデルとして世界中の人々に訴える力を持っている。

210×240、40ページ、ツーツライヤ刊、¥1200(税込)

お申し込みはツーツライヤ (☎019-681-8121) まで

第7章 篤農家へのインタビュー その①

まるで宗教家のような農業者、横田幸介さん

横田さんの職業は山林種苗業。平たく言うと、緑化のための苗木屋さんである。横田さんは2011年(平成23年)度の全国山林種苗品評会(全国山林種苗協同組合連合会主催)において、長年良質な苗木を供給してきたことが評価され、最高位の農林水産大臣賞を受賞されておられるほどの篤農家で、年齢は「じきに80代だよ」と笑っておられるが、今も現役バリバリの有機農業実践者である。

横田さんは長年自費で農業塾を主宰され、多くの人々に有機農業を伝え続けている伝道師のような、無私の人、周囲の誰もが認めている素晴らしい人格者である。

横田さんは本業の種苗育成の他に、家庭菜園(と言っても規模はかなり大きい)で、無農薬有機農業を実践し、健康な農産物を生産して、家族や近隣の人々のために役立てている。

その上に、時々はわが家にまでお裾分けを頂いたりするので大変恐縮である。横田さんの生産物は、健康に良いのは言うまでもなく、味の良いことも保証付きであるから、まずは横田さんのご自宅のビニールハウスの中で、具体的な土作りのやり方から教えていただいた。

「ボカシ」作りが土作りの第一歩

有機農業(有機栽培)には、ボカシ作りが大切だとあちこちで聞くけれど、一体、それはどんなもので、どうすれば作れるか、素人にもできるのか、知らない人もいるかと思う。そこでまず、率直に聞いてみた。

【以下、「」に「横」とあるのは横田さん、「加」は聞き手・加藤】

加「横田さん、『ボカシ』って、何ですか？」

横「『ボカシ』とは、『ぼかす』すなわち、醗酵という意味なそうです。微生物による有機質の分解が進むと、白い綿のような菌糸が有機物の表面に出てきますが、その菌糸の出具合で良いボカシかどうか分かります」

加「ほー、ボカシは『醗酵』から来ているんですね」

横「そうです。私たちの花巻周辺地域では、酒作り出稼ぎ集団の南部杜氏の町でもあり、醗酵に必要な菌の働かせ方、特に、麴作りは酒の基本となるもので、この作業がすごく上手い人たちが多いんです」

加「『菌』と言っても色々ありますが、有機農業に必要な菌にはどういふものがあるんですか？」

横「まず麴菌ですね。これは酒や味噌に必要な、澱粉を糖に変える菌です。次に納豆菌。これは大豆などのタンパク質を分解する菌です。それから酵母菌。麴菌の作った糖をアルコールに変化させる働きをします。それと放線菌。これは通常、空気を好む、好気性の菌で、雑菌または有用菌の

角質を食します。それと乳酸菌。これはチーズ・乳酸飲料のほか、日本酒・醤油・味噌などの製造に必要な菌ですね。それらの菌が上手く増えると良いボカシができます」

加「よく『EM菌』という名前を聞きますが」

横「それは元琉球大学教授の比嘉照夫先生が開発された『有用微生物群』の略語のことですね。今言いたいいろいろな菌やその他の菌、嫌気性の菌も含まれているということですよ」

加「それは私も知っています。以前参加していた環境行動グループ主催で比嘉先生を松尾村（現八幡平市）にお招きして講演会を主催したことがありますので。そのときは、EM菌を使ったボカシ作りの実演をしてくれた人もいました。私はEM菌を使ったボカシ作りをして、花をきれいに咲かせたことがありますけど。横田さんの所でもEM菌を使っているんですか？」

横「いや。自分の所では土着の菌を使っています」

加「土着の菌とはどんなものですか？ それはどこから手に入れるんでしょうか？」

横「私や仲間の農業者は、地元の農業には、地元の土着菌（微生物）というのが一番良いと思って使っていますが、それは自然の山林から簡単に手に入れられるんです。でも、菌を扱っている専門店から分けてもらうこともできますよ。そっちはちょっとお金が掛かりますけれどね」

加「できれば、経費が掛からない方がいいですね。横田さん

は、いつも山へその土着菌を取りに行かれるのですか？」

横「ハハ、それは最初だけです。毎度行く必要はないですよ。土着の、良い菌（有用醗酵菌）が沢山含まれている土を取って来るか、その林に行つて土着菌の集まる方法で菌を取つて来て、一度、優れた『ボカシ』ができたなら、それを種菌にすれば繰り返し使えますから、費用が掛からないです。大事なのは、その種菌の保存に気を付ければ良いだけです」

加「なるほど。そうすれば良いのですね。ところで、良い土着菌が含まれている土はどうやって見分けるのですか？」

横「何事も自然をよく見れば分かります。山野の植物は、特別肥料をやつたり、消毒をしたりしなくても、落ち葉が微生物によつて腐葉土に分解され、それを栄養にしてまた植物が育っている、というように、自然の循環でうまくいつているでしょう。あれを見ればいいんです。フカフカの腐葉土、そこに大体良い菌がいます」

加「自然をよく観察すれば分かるということですね」

横「そうです。自然が一番良い教師ですから、自然に習えばいいんです」

加「大切なことを教えてもらいました。でも、年中、山へ土を取りに行くのはちょっと。大変そうです」

横「山を持っている人でもそれは大変です。それに、山が無い人が、他人の山の土をしょっちゅう貰ってくるわけにもいきませんしね。だから、その代わりに人間が土作りをす

るんです。土作りについてちよつと言っておきますと、畑で作物を作る土には、前から、と言つても、戦後（太平洋戦争後）ですが、肥料の三大要素といって、『窒素、リン酸、カリ』と教えられ、それ等の化学肥料を畑に投与するのが常識だと言われてきました」

加「私も中学生時代に理科の授業で習った覚えがあります。

それらが不足すると作物がよく育たないと教えられました」
 横「戦後のように、食料が不足していた時代にはそういう化学肥料を大量に入れて生産するのはやむを得ないことだったのです。それに、戦中までは人糞や牛馬の糞、鶏糞などを利用したり、金肥と言われる、金銭を支払って買入れた人造肥料や化学肥料を利用したりしている人が多かったのですが、戦後、食料増産のために、前述の『窒素、リン酸、カリ』の三大肥料が急速に普及し、使い勝手の良さと効果に皆、目が眩くらんでしまったのです。

三大肥料を使うと、確かに見かけは立派な作物が育ちます。けれど、身体には必ずしも良い作物ができるとは限りません。三大要素が突出した、栄養価の偏った作物になってしまうんですね。それに対して、『ポカシ』作りをして、ポカシを沢山畑に投与した所ほど、栄養が偏らない、体に良い作物ができるんです。つまり、まず、健康な土作りをすることが、健康な作物を作るためのとても重要な第一歩なんです」

加「安全安心、健康に良い作物を作るためにはまず、健康な

土作りが土台なんです。ポカシ作りは、その意味で、とても大切な作業であるということがよく分かりました」
 横「良い土はすぐにはできません。作物が吸収した分、根気良くポカシを作って土に補ってゆくのが大切です」

加「地味な作業なんです。ところで、体に良い作物とは、

どうやって判定しているのですか？」

横「食べるものは、食べる前に良し悪しが分かるのが一番です。それから、それには私は、仲間もそうですが、加藤さんのやっている波動測定を信頼して判断しています。良い土作りのできた畑の作物の波動測定数値は、その土壌の波動数値に比例してきますから、個々の作物をいちいち測定する必要はなく、作物を作っている土を測定すればすぐ分かるんですね。

だから、良い土壌作りには波動測定による裏付けがあることはとても大事で助かっています。私のところでは、波動で土の中のミネラル27項目を測定してもらっています。それで、身体に良いミネラルと、悪いミネラルが判るようになっていきます」

加「我が家の子どもも、波動測定によってアトピーの原因が分かり、対策が立てられ、順調に治ったので、そのおかげだと感謝しています。いろいろ伺って、ますますポカシ作りに興味が湧いてきました。それでは次に、『ポカシ』を作るために、有用菌の他にはどんなものが必要なのか教えてください」

横「はい。まずは米糠^{ぬか}。これは米を精米するときに見える糠です。それやフスマ。フスマは小麦を引いて粉にしたときに出る皮の屑です。麦糟^{かす}とも言っています。それから脱脂大豆糟、これはクズ大豆でも大丈夫です。それと菜種糟、魚粉、牡蠣殻石灰^{かきがら}。これらの資材は、農業用資材屋さんで手に入ります。それらに加えて水と糖蜜または砂糖が必要です」

加「いろいろ必要なんですね」

横「そうです。家庭で調理の際に出る野菜屑や残飯等を入れても良いのですが、それ等を入れると、醗酵^{かす}がうまくゆかないで、腐敗臭が出るが多いので注意する必要があります」

加「醗酵^{かす}がうまくいったときはどんな匂いをするのですか？」

横「ボカシの良くてきたものは、人が食べたくなるような、いい匂いものになります。ネズミが喜んで食べるものは良くてきたボカシと言えます」(笑)

加「ボカシ作りに必要な材料の割合や作り方は教えて頂けますか？」

横「それは、気候や土地の条件や資金事情などが各農家で違うと思いますから一概には言えませんが、材料の中で一番大事なのは牡蠣殻石灰^{かきがら}です。これは土壌中の有害化学物質を浄化するのに役立ちますので、ぜひ使って貰いたいです」

加「材料の他に、必要な道具類がありましたら教えてください」

横「我が家では、ボカシの種菌を作るときには、生ごみ処理機を使って作っていますが、大量に作るときには家庭菜園なんかでは、ブルーシートやビニール袋、段ボール箱、寒いときは暖房機を使って作る方法もありますよ」

横田さんのビニールハウスには二槽洗濯機くらいのお大きさの、家庭用規模の生ごみ処理機が設置してあった。横田さんはそれを、ボカシ作りに使用しているとのこと。

加「他に必要なものは何でしょうか？」

横「あとは、木酢液^{もくさくえき}と活性水です」

加「木酢液とは何ですか？」

横「炭焼きをするときに出て来る蒸留水で、炭の香りのする液体です」

加「それは何の役に立つのですか？」

横「いい質問ですねえ」(笑)

横田さんはここに顔で答えてくれた。

横「生物は酵素^{たか}の働きなくして生命維持ができないといわれています。土の中の微生物(有用菌)も同様で、まず土中に有機物が沢山入ると、それを分解する有用菌が働きますが、そこに木酢液や活性水^{せきすい}や炭を入れると、それらが土中の有

用菌の働きを活性化させる力があるようで、菌の働きが高まると酵素の生成が高まり、土中の残留農薬（有害な化学物質）を包み込んだり、無害なものに分解してくれたりしていると思われるんです」

（*）酵素とは、難しい科学用語では、「生体内で営まれる化学反応に触媒として作用する高分子物質のことをいう」とあり、触媒とは、「自身の性質は変わらずに、他の物の変化を促進する媒体になるものこと」を言うが、この場合では、木酢液や活性水、炭などがその触媒として、有用菌の働きを高めて、有害な化学物質を無害なものに変化させるのを促進する働きをすることを言っている。

（*）活性水とは、水分子（クラスター）の小さい、吸収率の良い水のこと、山の岩などから湧いている自然の水などがその条件に合っている。横田さんのところの活性水は、家畜の糞尿をタンクに入れ、有用菌を使用して窒素等の肥料成分を飛ばしている酵素の多い液のため、それを酵素水と呼んで作物に利用しているそうである。

健康に良い作物はまず土作りから

加「一つ素朴な質問をしていいですか？ ポカシを作るときに、横田さんは牛や豚や鶏等の排泄物は使わないんですか？」

横「使いません。材料はさっき言ったような物だけです」

加「それはなぜですか？ 八幡平市でも、コンクリート等で囲いを作り、家畜の排泄物を土に混ぜて堆肥作りをしている農家さんが結構いますか？」

横「そういうものを私のところでなぜ使わないかというところ、動物の排せつ物を入れると、作物の生育は早いし、形は立派な物ができますが、窒素等が過多になって、栄養的にはあまり望ましくないものができるからです。その弊害を無くすには、草や落ち葉や稲わらを沢山混ぜて醗酵させ、三年くらい完熟させると良い堆肥になるから、それから畑に入れるのがいいですね」

加「でも、三年はかなり長いし、なかなか待ちにくいですよ」

横「そうだね。でも焦っても、いい土はできないんだから。健康のためには、腰を据えて、まず良い土作りをすることが大事ですよ。だから、畑にゆとりがあったら、その三分の一は土作りに回し、他の三分の二で作物を作る。そうやって土ができたら順に作物を作っていくのが理想だし、効果的です」

加「その辺を少し詳しく話してください」

横「その三分の一の畑に私が何をやったかというところ、金肥（お金で買った窒素、リン酸、カリの合成肥料）を撒き、まず雑草を生やした」

加「え？ 雑草にわざわざ肥料を？ 何のためにですか？」

横「またまた、いい質問だね（笑）。雑草は合成肥料を吸って

育つから、すぐく勢いが良い」

加「そうでしょうね」

横「ここから話は難しくなるけれど、その雑草を畑に鋤き込んで堆肥化すると、雑草が、吸い込んだ窒素、リン酸、カリを、作物が吸収し易い、マイルド（穏やかな）ものに変化してくれるから、作物のために、良い土になるんです。しばらくしてそれを農業塾の指導者の本間光義ほんまみつよしさんに見せたら、『いい土ができたね』と褒められたくらい、良い土になっていた」

(*) 本間光義氏。八幡平市出身の元岩手県立農業大学非常勤講師。微生物農業研究者。同氏を指導者にして横田さんが代表となつて同志と立ち上げた「本間農業塾」は、花巻市内を主な会場に行われている。

加「そうですか」

横「つまり、ここから話は難しくなるけれど、動物の排泄物や、化学合成肥料を入れてあつた畑の土は、作物が吸収しにくい硝酸塩（窒素分の塊みたいなもの）、ヤリン酸塩、カリ塩の形で残存しているから、畑が塩を吹いたように見え、土が固くなっている。それを雑草が緩和してくれる、ということだけけれど」

加「そうになると、身体に良い作物ができる土になるといふことですか？ 残念ながら学生時代、化学は苦手だったから、

理解しにくいです」

横「そうですか。こういうことは一般の農業者もあまり知らないですよ。だけど、そうやって作った自家製の堆肥が一番安全だから、安心安全の、健康に良い作物を作ろうと思つたら、雑草に助けをもらうのが早道、ということになるんだね」

加「頭ではなんとか理解できました」

横「ハハ、あとは実践するだけだね」

加「はい。それが一番むずかしいんですが。ところで、雑草にも色々ありますが、雑草なら何でもいいんですか？」

横「雑草は、特に一年草の草がいいね。例えば、ヒメ芝や雑草化したヒエ、アカザ等の、茎が固い草。多年草ではヨモギがベスト。牛糞や鶏糞は、エサに窒素やリン酸や、カリ分が多く、栄養過多なので、即効性があるけれど、さつきも言ったように、身体に良い作物を育てるには、穏やかに効いてくる草を鋤き込んだ方がいいんです」

加「——と、おっしゃいますけど、草を鋤き込むと、雑草がどっさり生えて除草が大変なのではないですか？」

横「だから、草が目いっぱい伸び、開花しないうち、実を結ぶ直前に機械で鋤き込んでしまえばいいんですよ。そうすると良い土ができるんです。仮に、畑に望ましくない雑草が生えているときは、イタリアンライグラス、またはライ麦の種を買って蒔き、それを鋤き込むと、すぐく良い土に

なるから。前にそれを田んぼでやったことがあるが、「豊錦」という銘柄の米で、普通10俵とれる田んぼで、14俵収穫できたことがあったね」

加「それはすごい。ライ麦といえば、私のところでは、主人が前に、やはり本間光義さんに教えて貰ったといつて、家の横に借りている畑にライ麦の種を蒔いたことがありました。青々とよく茂ったそれを、しばらく生やしていましたがありましたけど、そういうことだったんですね。その理屈が今頃やっと分かりました。今では笑い話ですけど、都会から移り住んだ私たちが、そんなことをやり始めたものだから、通りすがりにそれを見た近所のお百姓さんが、

「『都会から来た人は変わった農業のやり方をするんだねえ』と半ば呆れ顔で言っていたよ」と主人から聞いたことがありました。ライ麦を生産しているのかと思ったら、それを畑に鋤き込んでしまったからですね。(口絵②)

大分経ってから、主人が理由を話したら、その人は納得してくれたようです。私は今頃になってやっと、理解できたような次第です。随分遅いですけどね。

その後、主人は大豆をずっと作っていたんです。そのわけは、大豆の作り出す根粒菌を畑に増やすためだったと、これも後から知りました。これまでは主人がそうやって汗を流して土作りをして作った作物を、収穫して只、頂く一方でしたから」

横「ご主人のように素直に実践するのが大事だね」

加「そうだと思います。主人は、子どもが病気をしたことで、

食べ物の大切さを痛感したので、少しでも自ら作らねば、と思ったと言っています。何年も掛かって土作りをし、その都度、波動測定して良い土になったかどうか、確かめていました。本間さんや横田さんに教えていただいたお陰で、私たちは少しでも安全で、味も良い作物を食べられるようになってきたと家族一同、日々、感謝しています。」

横「それは良かった。ここで、蛇足のようだけど、草の堆肥を早く醗酵させたいときは、雑草に窒素肥料をやると、雑草の伸びと分解が早まるから、化学肥料も使い方ひとつだ、って付け加えておくね」

加「それはつまり、頭を柔らかくして、考えながら農業をするのが大事だということですね」

横「そう、そう。自分で考えて、試しながら取り組むのが、すごく大事なんだよ、特に農業は」

何を聞いても、経験に裏打ちされた答えがすぐ返ってくる。さすがは、その道のベテランの横田さんである。

農作物には作る人の心が入る

横「ここでとても大事なことを言っておきたいんだが」

加「大事なことがいっぱいあるんですね。それは何ですか？」

横「同じ条件の土作りをして同じものを植え、同じように収穫すると、みんなは同じものができる、と思っていると思

うけど、それが違うんですよ」
加「えー、どこが違うんですか？」

横「形ではなく、質が違うんです」
加「質？」

横「卑近な例で言うと、ある所の同じ土質で隣り合っている畑で、ほとんど同じ資材を使用し、同じように施肥して収穫した果物についてですが、ここでは差し障りがあるので、果物の名前は伏せておきますけれど。波動測定してみると、数値がはっきり異なって出たんです。食味も違っていました。それで不思議に思っ原因を色々探ってみました、これだと思ふことが出てきました」
加「それは何ですか？」

横「その果物を作った人を仮にAさんとBさんということにしておきますが、波動数値の悪く出たAさんは、どちらかといったら、日頃の言動の中から、経済性を重視し、ソロバン片手の経営観に見える人です。波動数値の良かったBさんは、これはBさん本人からも、また、周囲の人たちからも聞いた話ですが、『美味しい果物になれよ。健康に良い果物になれよ』と、しょっちゅう果物の木に語りかけて育てている人だということが分かったのです。これは大事なことだと思いました」
加「それは全く同感です。実は、私も、そのBさんの作った果物を味わったことがあります、本当に美味しくくて、健

康にも良さそうで、感動したことがあります。今でもその味は忘れられないほどです」

横「そうでしょう。そのくらい、作物には作る人の思いが入ってしまうのです。人の心が作物に入るといふ事は、『水からの伝言―世界初!! 水の氷結写真集―』（江本勝著、波動教育社）」という、写真集を見たときに強く感じました」
加「はい。私もその写真集、家にあります」

横「それを見ると、『愛、感謝』の言葉を紙にタイプした文字を瓶に貼り、そこに入れた水の結晶は、一晩置くと、雪の結晶のように、六角型の形が均整のとれた写真ですが、『馬鹿、死ぬ』という罵声ばせいをタイプした紙を貼った瓶に入れて一晩置いた水の結晶写真は、崩れた六角型になっていたのを見たのです。

そんなふうには、言葉、すなわち心が水に伝達するのを確認したこともあり、経済ばかり考える人には作物の心が理解できないと思っています」
加「それは興味深いですね」

横「そう思います。確かに経済性を考えるのは大事なことです、それが優先だったりそれに偏ったりしていると、できるものはそういう波動を示す、ということだと思っています」
加「私も家で食事を作るとき、良い気持ちで作るように心掛けてはいますが、疲れているときには、正直、面倒くさいなど思うこともありますので、注意しなければと思います」

横「そうですね。目に見えない心は全ての物に影響している
と考えると、我々農業者の日頃の思いを大切にしようと思
います」

岩手の生んだ宮澤賢治の願っていたもの

横田さんへのインタビューは心の世界にまで及び、大変深
い話になってきた。ここで、話は私たちの郷土、岩手の生ん
だ詩人で思想家、児童文学者、また科学者でもあり、農業実
践者でもあるなど、多彩な顔を持っていた宮澤賢治のことに
まで及んだ。横田さんは「宮澤賢治の農業に関する哲学」な
るものを語ってくれた。

横「ところで、加藤さん、宮澤賢治は童話や詩などの文学で
著名ですが、実は、農業の理想を達成したいと願っていた
人だったとは知っていますか？」

加「いいえ。私は恥ずかしながら、賢治の文学に詳しくもな
いし、農業の方面にも知らないことが多いです。賢治の作
品では、『グスコープドリの伝記』が好きですけど。冷害か
ら農民を守ろうと、グスコープドリが自分の命を犠牲にし
る、という、涙無くしては読めないお話で、感動して読ん
だ覚えがあります」

横「そうですね。私も詳しくはないけれど、賢治さんが農家
の土壌改良のために炭酸カルシウム（石灰粉）を農家に使

わせようと努力したが、当時の農家は皆、貧乏で、農業資
材にお金を使えなかった。そのため、賢治さんの理想の土
壌作り普及は頓挫し、その後、賢治さんは文学に生きてい
った、と、私は感じています」

加「それはつまり、私たちが賢治さんに感じている、思想家
であり、詩人や児童文学者である賢治さんの姿を偏^{かた}って捉
えているということでしょうか？」

横「私は、私の母校でもある花巻農業高校の先生をしていた
賢治さんのことを、折に触れて先輩たちから見聞していた
のでそういう感想を持っています」

加「それはすごいですね。私は花巻市在住の藤根研一氏のご
著書、『賢治スピリッツ・IV―農業技師【宮澤賢治】―（自
費限定版）』を読ませていただいてやっと分かったくらいで
す。認識が不足していました」

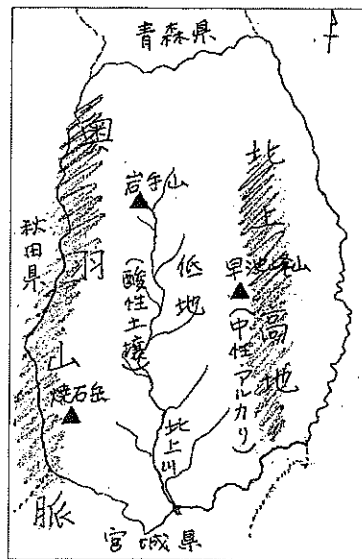
横「その本は私たちの主宰している農業塾で藤根先生の講演
会をした折に藤根さんが皆さんにプレゼントした本ですよ」
加「そうですね。主人（加藤喜代治）が、その農業塾に参加し
ているときに頂いて帰った本です」

横「それにも書いてあるはずですが、岩手県は、県央の北上
川を挟んで東側は早池峰山を主峰とする北上山地の土壌は、
花崗岩、蛇紋岩、石灰岩の土壌ですが、西側は岩手山を中
心に、火山性の山脈です。（次ページ図参照）

南は焼石岳から始まり、岩手山までの土壌は大昔、十和

田火山、焼石火山の噴火した火山灰の積もった洪積層台地が続く、酸性土壌のため、水田でも、10a(アール)当たり、3〜3・5五俵(180〜210kg)しか収量がなかったそうです。

岩手県の土壌の性質



賢治さんはそれを見て、山地では野宿をしながら、山地、耕地の土壌調査を行い、花巻地方を中心に調査資料を作ったのです。次いで、農家に対し、作物の増収のための指導をし、土壌改良のため、岩手県東南部の一関市東山町より炭酸カルシウム(石灰粉)を仕入れ、それを農家に使わせようです。

ですが、農家の多くは金を出して資材を買うことができず、指導を繰り返しても、農民の取り付きの悪さに遂に降参したのではないかと思います。

私も木酢液や活性水を只で差し上げているときは皆さん喜んで使いますが、費用がいくら掛かると示すと、持って行かなくなります。

宮澤賢治さんに関しての世人の研究は、文学・芸術方面

の本の方が出回っていますし、盛んですが、賢治さんの本望は、土壌学を極めた人ですから、農業指導こそ大事なところと思いつつ、若い生命を終えた人、と私なりに解釈しています。

賢治さんが現代生きておるならば、土作り農業は変わっていると思います。賢治さんについては、花巻市にある、宮澤賢治記念館に各種資料が揃っていると思いますので、参考にしてください」

土に残留している有害物質の除去が大事

横田さんの話はまだまだ続く。

横「70年前は肥料、農薬等、化学物質は少なかったのですが、土壌の汚染はなかったのですが、現在は昭和30年代、40年代以降に使用し、現在も使用している化学物質の蓄積が土層により、残留している土があります。

火山灰層の下層に水を通さない不透水層がある場所もあり、蓄積していた化学有害物質(稲のイモチ病の消毒のために使用した水銀等)が下に流れずに溜まり、毛細管現象により、上下に移動しているようです。それらが作物に入り、人の健康に害を及ぼしていると考えられます」

加「それは忌々しきことですね。それらの有害化学物質はどうやったら除去できるのでしょうか？」

横「それが、ずっと言ってきたように、ボカシ作りをして、有用菌(有用微生物)が働きやすい環境を作れば、有害な化学

物質を無害なものに変えてくれるので、そういう役割を果たしてもらいたいにも農家の皆さんにはぜひ有機農業を実施してもらいたいと思っっているんです」

(*) 牡蠣殻石灰に含まれている亜鉛が水銀を包み込んで(キレートして)分解し、無害なものにしてくれる。リンゴは昔、水銀消毒をしていた。その残留水銀が土層に溜まっており、それが人間の健康に害を及ぼしている。

根気よく土作りをするのが肝要

加「そういう意味でもボカシ作りが重要だと感じておられるのですね」

横「そうです」

加「ところで、これは最初にお聞きすべきだったかもしれないですが、横田さんはなぜ、どういうきっかけで有機農業を志されるようになったのですか？」

横「私は平成7年、母校の花巻農業高校時代の同級生を通して先述の本間光義さんという微生物研究家の先生と知り合い、微生物の話聞いたのがきっかけです。それで同志と『本間農業塾』というのを立ち上げ、今まで11年間、その勉強を継続してきました。その勉強の中で、平成10年に波動の加藤さんと知り合い、本間先生を始め、加藤さんやその他の先生を講演会の講師にお招きして今日(平成28年)まで45回、塾の勉強を開催してきました。

今後も続けますが、参加者は多いときに70人を超え、

少ないときでも30回40人、県外は青森、秋田、宮城等から、遠くは大阪からの参加者もいました。そこで農業の現場での実施を含め、微生物の勉強会をしてきました。

一番言いたいのは、微生物は土に入った場合、温度、湿度等の関係で働く能力が異なってくるので、失敗を恐れず、根気よく、自分で考えて土作りに年数を掛けるしかないということなんです。良い土は一朝一夕にはできません。

本間農業塾で学んで、すぐ体に良い(健康に良い)作物を作り、口コミで消費者に供給している人もおりますよ」

加「ということは、有機農業は簡単ではないけれど、健康に良いものができ、それを求める人が多ければ、有機農業でも暮らして行けるということでしょうか？」

横「それは、その人の考え方によるところが大きいでしょうね。お金と命、それを天秤に懸け、どちらを優先するか、その人の志に懸かっていると思います。だから、全部の畑を有機農業に切り替えないで、三分の一を土作りのために休ませておき、残り三分の二で有機作物を作る、というのが大事だと思います」

加「有機農業のやり方は心構えがとても重要なのですね」
横「そうです。それが肝要です。それと、何事もよく観察し、自分で考えるのが大切ということですよ」

横田さんのお話は、農業現場での失敗談から、「水の良し悪しの判断はどうしているか」、「連作障害とトマトハウス栽培

20年以上の秘密」、「客土・深耕」、「土の顔を見ながら作物を育てるとは」、「波動の活用 of 動機・また活用法」 「有機農業で国民の健康を守れば、国家予算に占める医療保険料の削減につながる」等々に至り、尽きることがない。

横田さんの場合、失敗と見えるものも、全て成功への道へつながっているから、失敗だけに終わる、ということは何もないようで、すごく前向きな考えで共感できる。

最後に、横田さんのお世話で、有機農業産の食材を摂り続け、生きるか死ぬかの瀬戸際の病状（化学物質過敏症）が改善された人の言葉を紹介しよう。

それは現在大変元気で活躍中の東京在住の女性（50代後半）の方であるが、その方は横田さんへ次のようなお礼状を寄せている。

「自分の体の健康を維持するのは、結局は『自分の選択』だということ、そして、『命につながるものはすべて手をかけなければだめだ』ということを私は闘病を通じて知りました。命は本物を求めるのだと思います。利便性に惑わされ、つつい安易な方向に走ろうとする怠惰な心こそ、本当は命の敵なのではないかと私は思います」と。

このような感謝の言葉は、懸命に土作りに励んでいる有機農業実施者への何よりのエールになるのではないだろうか。

長くなったので、この辺で横田さんへのインタビューを終わりたいと思うが、横田さんの顔を見てみると、農業宗教家ではないかと感じられてならない。それはきっと、横田さん

が農業を通して人作りを心掛けておられるからではないかと思う。そう感じるのも、横田さんは次のような小冊子^(*)を出版されているからである。

(*)横田さんは平成27年、夢うつつの中で死後の霊界への入口を垣間見た体験を『私は三途の川を見た』と題して小冊子（ツワライフ出版）に発表。死後の世界（霊界）の存在を信じている氏は、折にふれて周囲の人々に「人間は生命ある内に善徳を積み、死後、良い霊界に行ける準備をすることが肝要」と説いている。

横田さんのハウスは居心地良く、時間のたつのを忘れてしまった。見学させていただいた畑の作物はどれも生き生きとしており、土も喜んでいようだった。

横田さんへの取材は最初が2013年（平成25年12月5日）場所は横田さん宅の農場のビニールハウスの中だった。

追加取材を行ったのはお互いの都合が折り合わず、だいぶ時が経ってからだったが、2017年（平成29年1月17日）場所は花巻市石鳥谷の八重畑振興センターにて行った。

最後に横田さんの略歴を紹介し、この章を終了する。



《横田幸介氏略歴》1938年岩手県出身。花巻農業高校卒。昭和32年より山林用苗木生産に従事。八重畑・石鳥谷各農協理事、東部改良区・岩手県山林種苗組合各理事を歴任。本間農業塾主宰。全国山林種苗畑品評会農水産大臣賞受賞。

さて、私は、同センターにて日を改め、2017年（平成2

9年2月7日)、花巻市轟木町^{とじろき}在住の篤農家・高橋泰輔さんへの取材を行い、同年3月28日、同センターで同じく横田さん同席で2回目の取材を行った。その模様を次に報告する。